
とある妄想の現実破壊(リアルブレイク)

魔王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある妄想の現実破壊^{リアルブレイク}

【Nコード】

N51070

【作者名】

魔王

【あらすじ】

少年、赤霧 闇耶は、朝いつものように目覚め、いつものよう鍛錬し、いつもと同じケンカに明け暮れるちょっとオタク的な日常を送っていた。だが非日常は突然やってきた。少年はトラックに引かれ神という爺さんに出会う！・・・うおおおおその現実を破壊する！！

そして、とあるの世界へ！！！！

日常と非日常が交差する時選ばれた運命の物語は・・・・・・始まる・・・と、思う

主人公紹介と自己紹介（前書き）

ブログ始めましたwww←

http://ginnzituhaikai.blog136.fc2.com/blog-entry-1.html
始めたばかりなので誰かリンクお願いします。

主人公紹介と自己紹介

初めて小説とか書きます。作文とかにがてですけれどがんばります。
受験生なので不定期更新いきなりやめたりするかもしれませんが
ご注意を

物語とか時期とか違うところもあると思いますが見逃してください
><

すべて思いつきで書いてるので駄文です。

主人公設定

名前…赤霧^{アカギリ} 闇耶^{シンヤ}

身長…172?

体重…58?

性別…男

性格…ちよつとめんどくさがり屋、ロリコン、意地っ張りでやると決めたことは意地でもやりとおす。欲張りでいつも非日常に憧れを抱いている。

見た目…黒髪、黒目で髪は肩ぐらいまである。前髪は常に伸ばされ

ていて眉毛が隠れるくらい。顔の形が非常に整っており普通にイケメン

家事スキルは母親がいなかったためすごくいい

体格..体はごつごつしていなくて細マッチョ的な感じ

一人称..俺

所属..草風高校1年

主人公紹介と自己紹介（後書き）

この小説の画像作ってみました

> i 1 3 2 3 4 — 1 8 5 2 <

日常との別れ

月曜日 現在の時間5…00分

俺、赤霧 闇耶は、いつもと全く変わらない朝に目覚めた。

『あー、今日から学校かー』

ベッドから起き上がり一度伸びをしてからつぶやく。そしていつもと同じように着替えて、鍛練をするため家のすぐ隣にある“道場”に向かった。

何故道場なんてあるのかというと親父がこの道場で師範をやっているからだ。親父の名前は赤霧 源次ちなみにものすごく強い。しかしいつも道場において家の事など全く見ていなかったため母親は愛想を尽かし、いなくなってしまう離婚した。その時、闇耶も一緒に誘われたのだが、まだ一度も源次に組手で勝ったことがなかったため悔しくて親父の方に残ることにした。そのことを伝えた時の母親の顔は今でも覚えている。泣きそうになりながらも必死に笑顔を作り「そう」と一言だけ言い去って行った。

道場

ガラガラ

『親父、来たぞ！ 今日こそ負けねえかな！！』
表情には出さないが（今日こそ勝ってやる）というギラギラした目をして威圧感を込めて言った。

「よし、来たなシンヤ、まずは準備運動からだ」

源次はいつもどうりその宣戦布告を無視し俺に言った。

この親子のこのやり取りはすでに定番となりつつある。

腹筋、腕立て、スクワットを200回ずつやり道場の周りを軽く走る少し休憩したところでいよいよ源次との組手が始まる。このむちやくちゃん鍛練のためか路地での喧嘩や、先輩複数相手に喧嘩を売られても、もちろん友達同士の喧嘩でも負けたことなどない。

『今日こそその余裕こいた顔を驚愕の顔に染めてやる』

俺は、多少狂喜じみた顔で親父にはぎりぎり聞こえない位の声でつぶやいた。

「?、何言ってるんだ早く始めるぞ」

源次は訳のわからないというように呆れつつ腰をを低くして構えた・
・
・

『フッ』

俺は先手必勝とばかりに右フックを放つ

「せいっ」

対する源次も右フックで対抗する。二人の拳が交り合い闇耶の顔が僅かに歪む。

「痛みを顔に出すな！なめられるぞ」

源次は痛みなどないかのようにふるまっている。

『うおおおおお』

空いた左手で拳衝を腹に叩き込もうとするがそれを軽く受け流しながら源次は左回し蹴りを放つ

『ぐっ　　ッッ』

紙一重でかわしたつもりが見切りがあまく頬を掠め一瞬目を瞑ってしまう

それを見逃すほど源次も甘くはなく

「ハッ」

と、右ストレートをが俺のみぞおちに入った

『ガハッツツ』

ドンツという鈍い音が道場に響き闇耶は吹っ飛んだ

受け身をとりもう一度かかろうとするが源次の言葉で止められた。

「今朝はここまでだ、今日は学校だろう？」

時計を見るとちょうど7…00分になったところだった。タオルで汗を拭きせき込みながら

『学校から帰ったらまた頼む』と、言い

道場を後にした・・・

その後、軽く朝食を作り、食べ終え歯を磨き顔を洗い制服に着替えるころには時間はもう7…55分になっていた。

あんなに時間があつたはずなのに。と思いながら誰にも聞こえない声で『ドンマイ俺』とか言いつつ急いで玄関に出て誰もいない我が家に『言ってきます』とつぶやき学校へ向かった。

ここから草風高校までには自転車で行くくらい急いでも20分はかかる。HRが始まるのは8…20分からだ。

とりあえず俺の出せる限り全力でペダルをこいだ……………

目的の場所（教室の自分の席）に座ると俺は机に突っ伏しながらつぶやいた

『あーだりー疲れたー早く家帰りてー』

「学校来て開口一番それかよ!!」

すかさず突っ込みを入れてくれるのは友達のAくん、唯一の友達だ。Aくんとは“とある魔術の禁書目録”というアニメの事で気が合いこうして話している。

「何か俺の扱いひどくない？」

『ン？なんか言ったか？』

「いや別に、それより昨日の禁書見た？」

『おう、流石一方通行かつこよかったな!』

「打ち止め守った時マジ感動したわ」

いつものように雑談しているとやがてH Rが始まり退屈な午前の授業が終わった。

——昼休み——

友達Aを誘って食堂に行こうと席を立ったら教室が急に静かになった。皆が見ている方に目を向けると耳にピアスをつけ、髪茶色に染めている、ただ体中についている包帯と湿布が不自然だった。制服についているバッチの色から見るに自分たちより上のクラスだと証明している。たしか一昨日5人ぐらいでケンカ売ってきたやつらの一人だ。その格好から明らかに不良です☆と言っているような不良Fは俺の席の前まで来た。

「おい！ 赤霧ちよつと屋上にまで付き合え！！」

『付き合うってそんな／＼急すぎます／＼』

俺は挑発の意味でとりあいず馬鹿にしてみたww不良Fはその挑発に乗ったらしく顔を真っ赤にして怒鳴りながら「いいから来い！」と強引に俺を引っ張って行ったその時Aくんが俺を心配そうに見ていたが口ぼくで（軽く潰してくる、心配はいらない）と、伝えておいたんだがその不安げな顔は消えることはなかった・・・

屋上には、それぞれバットやらスタンガンやら持った上級生（2年3人と3年8人）の計11人がいた。俺を連れてきた不良Fは、サツと目の前の集団の陰に隠れてしまった
多分一昨日の事がトラウマになってんだと思う（笑）

「よう、逃げずに来るたあ大した度胸だ！」

「この人数を見てびびらねえとは・・・馬鹿なのか??」

「一昨日のケリつけさせてもらうぜ」

先輩方は、それぞれに言いたいことを言ってくる。それを無視して俺は、この前は5人だったのによくまあこんなに集められるもんだと感心しながら、腰を落とし、かまえる。幾ら勝てるとはいえ一対複数の場合は油断は禁物だ。コツは一気にかたをつけようとせず相手の出方を窺うことだ。中心のリーダー格っぽい奴が仲間にか言ってるっぽい俺は気にせず一歩も動かない・・・・・・
と、先輩方は瞬時に逃がさないように俺の周りを囲み、襲いかかってきた。

まずは権勢のつもりで目の前にいたバットを振りかぶってるやつを
回し蹴りで吹き飛ばす

「ごハッ」

ゴキツと鈍い音がして後ろにいた3人を巻き込みながらそいつは吹っ飛ばす

瞬時に殺気がしたので振り返らずに後ろに迫っていた先輩のナイフを持っていてる手を右手でつかむ。そして気合いの声とともに一本背負いした。

『うりゃあああああ』

手をつかんだ瞬間「化け物かよ・・・」と先輩から失礼な言葉を聞き取ったので容赦なくたたきつけておいた。

それを見てやばいと感じたらしく、リーダーっぽいやつ以外は全員叫び声をあげながら扉の方に逃げてく。

リーダーっぽいやつが皆を引きとめるより早く俺は『おせえよ糞がああッ』、叫びながらジャンプし足を思いっきり高く振り上げ自分の身長より高い相手に振りおろした・・・

喧嘩が終わった頃にはすでに午後の授業が始まっていた。考えた挙句、、『帰るか』という結論に行きついた。後に彼はこの選択（幸運）に感謝することになる。

帰り道——それはあまりに唐突だった。ちょうど交差点をまがった時いきなりトラックが突っ込んできてとっさに避けようとしたがいかに喧嘩が強く反射神経もいいとしても所詮人間である。いきなり襲ってきたトラックに反応することなどできず・・・その日、、、

学校で最強の喧嘩男だった赤霧 闇耶は・・・死んだ。

日常との別れ（後書き）

その現実を破壊する。

僕の名言にしときましょ
すいません調子乗りました（「」）

神の世界

気がつくところは何もなかったw

と、思ったのだがいつからあったのかわからない。いや、何時からいたのかわからないが一人のあごひげ垂らして杖を持った偉そうな爺さんがこっちを凝視していた、視姦か？突然その爺さんが口を開いた。

「視姦とは失礼な、まあいい。いきなりで済まないがわしは運命を司る神で君はわしの手違いで死んだ」

言っている意味がわからなかった、神？手違い？俺が死んだ？　そうだ！俺はあの時トラックに引かれて死んだはずだ。それならなぜここにいる？さて、そもそも手違いって何だ？この話が本当だとしたら俺はこの爺さんのミスで死んじまったってことか？

俺は即座に文句を言おうとして

「わしの手違いで死んでしまった。そのことは謝る。じゃがお主は運のいい方じゃこれから好きな世界で好きに暴れまわれるのじゃからまあ、わしがここに來た理由は謝罪のために君をここに呼んだのじゃ」

『ツツ』

いっぺんにしゃべられて思考が追いつかない。あれ？俺の思考が読まれている？だとしたらこれ、いやこの人は本当に神なのだろうか？

そんなことを考えていたら神はさもめんどくさそうに紙とペンを差し出してきた。

「ここに好きな能力、転生先、転生先での容姿、など望む物をかけ。書き終わったら心の中でわしを呼べ。ではな」

『ちょッ』

俺が呼び止める前に神は紙とペンを残して消えてしまった。

その頃にはもう怒りは収まり俺はよく考えた今までにないくらい考えた。これはもしかして二次小説などに出てくる“転生”では?、と。ここで俺の日々溜めに溜めた妄想パワーが炸裂した

結論..もしかしたらチャンスじゃね?

転生先はもちろん“とある魔術の禁書目録”で決まりだし!!

能力は.....

んでいろいろ書き終えて神様を心の中で呼んだ...するとさっきと同じようにさっきまでいなかったのに最初からそこにいたような感覚で神様が現れた。

「書き終えたか。結構時間がかかったのう、一体どれだけ書いたんだか...」

視線を紙に写すと神は啞然とした

内容

1、名称、フレイム・ロード 能力、ゲートをくぐることで指定した場所にどこへでも行くことができる（転生先以外の世界でも行ける）黒子の転移よりも便利

2、名称、破壊の紅蓮炎 能力、すべてを焼き尽くす。例外なしにどんな能力も消し炭にする。

3、名称、神秘の青炎 能力、すべての傷を治す。例えば体が半壊していても脈と呼吸があればOK 病気も治せる

4、名称、黒の神火 能力、指定したものを吸収する。（吸収したエネルギーは自身の力に変換できる）

5、名称、パイロキネシスト・レベル3ぐらい

6、名称、不死鳥 例え寿命で死んでも指定した自分の歳に記憶と能力を引き継いだまま生き返る

7、魔術を使えるようになる

8、劫の眼 アイオンのめ

ヴェラードや皐月駆の金色の右目に宿る欠片。

ゾロアスターの魔術師によって造られた人の世のすべてを視るためにつくられた虚ろなる神器。未来視の能力を有するが、この真価は未来を引き寄せ、未来を掴むこと。イレブンアイズより。

9、送ってもらおう先は、高校二年で当麻のクラス、当麻と同じ寮。容姿はこのまま

10、持ち物、お金（9億ほど）と生活用品あと魔術用のルーンのカード

神は沈黙したままだった。なのでとりあいず声をかけてみた

『おーい神様？』

「ハッ、わしとしたことがつい！炎系が多いのうじゃなくてWこれはやりすぎではないかの？」

うっ、やっぱりそうきたか・・・でも引くわけにはいかない！！

『え？神様出来ないんですか？？？神様ともあろうお方が？』

「いや、、まあよいむちゃくちゃな能力な気がするがなんとかなるじゃろ」

自分でもこんなでたらめな能力が採用されるとは思ってもみなかった。なので自分でも驚くぐらい間拔けな声が出た。

『ほえ！？』

「なんじゃ？いらぬのか？」

『いえいえ！ありごとうございます神様！』こうして俺は不老不死の体と最強、無敵唯我独尊な力を手に入れた。アレ？この力があれば神様殺せるんじゃない？？

「言っておくが幾ら最強とは言え所詮わしら神の作った能力。神に逆らおうとすれば・・・死ぬぞ？下手な事は考えぬ事じゃの」

おお！読まれている・・・よしセバスチャン風に、、

『イエス・マイロード』

「????、では送る！たしか——とある・・・だったな」

そういうと神はなんか呪文を唱えだした

「えあくv gへ；おうg h w；くv g h 4 おうえ；..いb v h..えg b ヴええs s s」

俺には聞き取れない呪文の後に「元氣での」と、そんな声が・・・
・・・聞こえた気がした。

そして俺の意識は闇へと落ちていった・・・

目覚めと出会い

現在6…30分

ピリリリリリリリリリリ（目覚ましの音） カチッ（目覚ましを止めた音）

『むううあああッ』

俺はぽかぽか当たる日の光と景気の良い目覚ましの音に起こされた。即座に目覚ましを止めたがまださっきの音が耳に残っている。まだ完全に起ききっていない目をこすりながら部屋を見渡すとそこはベットと勉強机、冷蔵庫、キッチン クローゼットなど生活に必要な最低限のものだけが置いてある。

そこで俺は完全に目が覚めた。思考は昨日にさかのぼる。

たしか昨日は学校の帰りにトラックにはねられて死んで、神様とやらが現れてすごいでたらめな能力を得たとあるの世界にとばされた。、、、、

『ってことはもうここはとあるの世界か？？』

いまさらながらに驚いた俺だった。 独り言ってさびしいね・

俺の原作の知識が正しければここは東京西部に位置し、東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る円形の都市。総面積は東京都の

約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人（その8割は学生）で、と、そこまで考えたところで急にお腹が減ってきたので何か作ることにした。

『よし！とりあいず飯にするか！！』

冷蔵庫の中を見てみると思いのほか材料が沢山あったので朝から食べるもんじゃねえな思いながらも俺の十八番料理“ラザニア”を作ることにした。

まずは準備からだ。

ホールトマトをボールに入れて、手でつぶす。たまねぎ・にんじん・セロリ・にんにくをみじん切りにする。耐熱容器の内側にバター（またはマーガリンを塗る）

『よし次は』

トマトソースを作る。

鍋にオリーブオイルとにんにくを入れ、野菜を強火で木べら炒める。色づいてきたら、挽肉をいれ、弱火にする。赤ワインとローリエをいれ、弱火で水分がなくなるまで煮詰めていく。味付けに塩・こしょうを少々、足りなかったらブイヨンなど少し入れる。

ホワイトソースを作る。

またはフライパン

鍋にバターを溶かし（中火→弱火）木べらで小麦粉と混ぜる。だまにならないようにして、混ぜたら一度火からおろして、さまして牛乳を入れる。弱火でとろみがつくまで、とろとろ混ぜ、塩、こしょう、調理酒（白ワイン）で味付け。

パスタをゆでる。

鍋に塩を入れ、パスタを固めにゆでる。4〜5分。さいばしで引き上げ、水をはったボールにいれ、くっつかないようにする。

ミートソース↓ホワイトソース↓ラザニア（好みでラザニア大目もあり。）の順に2回ほどバター耐熱容器皿に重ねていく。表面にはモッツアレラチーズとバターを載せる。
焼く。

200℃のオーブン中段で15分ほど焼く。

できあがり♪

本格的なラザニアができた。それを15分程度でペロリと平らげる。食べ終えた時にはもう7…00になっていた。

『まだこんな時間か・・・よしトレーニングでもするか』

つぶやいたと同時に部屋の隅から着信音が聞こえた。

ピロロロロロ（電話が鳴る音）

『ん？誰だろこんな早くから』と言いつつ出てみると「赤霧 闇耶 じゃんか？」という女性の声が聞こえてきた。

この独特の喋り方は、たしかアンチスキル（警備員）の黄泉川さんかなと推測しつつ『はい！』と朝にしては元氣よく答えると女性は少し声を弾ませながら学校の名前と学校までの道のりを詳しく説明してくれた。最後に

「調書によると赤霧は外（学園都市の外）から来たそうじゃんでもそこらに珍しいものがあるからといって寄り道せずまずは学校にこい。学校に着いたら職員室に来るじゃんよ、そこで手続きしてから教室に案内する。くれぐれも寄り道とかして初日から遅刻はするなよ？」と重要なことらしく二回くぎを刺されいっぽう的に言われた後、電話を切られてしまった。

ツ、ツ、ツ、（電話の切れた音）

『原作どうり？ 一方的な女だな』

眩きながらクローゼットの中を漁っていると学校の制服らしいものがあつたのでそれを着てさっき言われた学校へ向かうためアパートから出た。

隣の標識を見てみると“上条”と書いてある。今にも部屋の中から不幸だーとか聞こえてきそうだと思う一人で笑ってしまった。無事、神の力を確認出来た俺は上機嫌にスキップでもしそうな勢いで学校へ向かった……

学校へ向かう途中初めて見るものや珍しい物がたくさんあって何度も立ち止まってじっくり見たいという衝動に襲われたが何とか耐えていた。

学校まであと半分ぐらいと、行ったところでロングヘアの黒髪の少女が複数の男たちに囲まれながら路地裏に入って行ったのを見た。俺は上機嫌だったので少しくらいいいかと思いつながら神の力を試すのもあるし『助けに行くか』と、結論を出し、路地裏に入っていた……

—— サイド?? ——

少女は今、今までの人生の中でも1、2位を争うくらい結構不幸な目にあっていた。まさか自分に限ってこんなことになるとは思わなかったのである。

少女の周りには、スキルアウト（無能力者の暴力集団）が取り囲んでいた。こんなことは少女にとっては、初めてで戸惑っていると男たちが

「きみ可愛いね」とか「今から俺たちと楽しいことしようぜ」ととか口々に言いながら私の手をつかんできた。

私は、やめて！と叫ぼうとしたのだが恐怖で「あ……うぁッ」とかすれた声しか出せない。彼ら（スキルアウトたち）は私が何も言わないのを見てニヤリといやらしい笑みを浮かべた後、強引に私を路地裏まで引っ張って行った……

なぜこんな事になったんだろうと、私は数時間前の朝のことから思い出していた——

私は、今日いつもより早く起きた。今日は私の好きなCDの発売日

だからだw早く学校の用意を済ませて新曲をパソコンでダウンロード購入して上機嫌で鼻歌を歌う。

つまり浮かれていた。

そこまではよかったのだが、浮かれ過ぎて家を出るのが遅刻ギリギリの時間になってしまったのだ。支度は出来ていたのですがすぐに家を出た。時間がなかったからこないだ友達に教えてもらった裏道を突っ切ろうとしたのだが運悪くその少年たちにぶつかってしまったのだ

そして現在に至る。彼らは私を誰もいなくなってきたところで解放し、立ち止まった。

突然、・・・・・『お前ら、その子放せよ嫌がってんじゃねーか？』その声は彼女にとって救い以外の何物でもなかった。

俺の目の前には明らかにガラの悪そうな連中が数人立っていた。そいつらは今にも泣きそうになっている中学生ぐらいの少女をとり囲んでいる。

『お前ら、その子放せよ嫌がってんじゃねーか？』

俺が言うど不良君達は一斉にこっちを向いて俺の姿を確認した後いきなり笑いだし俺をバカにしやがった。

主に

「ハハハハッこいつ一人で俺らに喧嘩売るつもりかよ！家に帰って部屋の隅でおとなしくしてろよ！！！」

「なにヒーロー気取ってんだよwwお前一人で何かできるワケ？現実を見な！」

とか・・・後ろの少女は心配そうにこっちを見ている、その現実をぶっ壊す、とか思いつつ相手を容赦なく潰そうと手に力を入れる、

同時に俺は地面を思いっきり蹴り相手に迫ろうとした・・・が、相手の一人が前に出てきて炎を手にとらせるとゴオオオとうなりを上げさせながらそれを放ってきた！

俺は『チッ』と舌打ちし再度距離を取る。相手は遠距離戦が得意らしく迂闊に前に進めない。

「ハッハハアッ、無能力者の集団だと思ったか？俺は能力者だぜえ、しかもレベル3ダァ」

相手は自慢げに語ってきやがる。正直キチガイとしか思えないしやべり方だ。

だがそいつ以外のやつらはまともな奴で能力者ではないらしく後ろ

でニヤニヤと笑っているだけだ。

一瞬、劫の眼を使おうかと思ったが、たしか神からの能力の一つに俺も相手と同じレベル3の“パイロキネシスト”としての力をもらったはずだ。

相手の力と相殺できるかな？と、思い至りこちらと同じ能力で相手をすることにした。

何故レベル3かというと、レベル5になっちゃったら目立ち過ぎてアレイスターに目をつけられる恐れがあるからだ。

故にパイロキネシスト以外の力は命の危険がある時以外は滅多に使わないつもりだ。

『まあレベル6ぐらいの力も持ってるんだけど・・・』

言いながら目を閉じ集中する・・・今相手が放ってきた炎と同じぐらの炎を・・・

代わりに相手の炎目の前には飛んでくる！それをギリギリでかわそうとするが少し腕に掠った『ツツウ』顔を顰めながら追撃に備える。が、追撃は来なかった。相手はすでに地面に倒れ気を失っていたからだ。

目の前にはツインテールの髪をした胸の残念な子（黒子）が立っていた。

「ジャッジメントですよ！わいせつ及び暴力の現行犯であなたちを拘束します！！」

その声を聞いて「うそ？みっちゃんがやられた？」やら「やべえジ

ヤッチメントだ、逃げろ！！」だとか言い皆、散りじりに逃げてゆく

黒子はテレポートで自身を移動させて回し蹴りを放ったり“ダーツ？”を服と地面に突き刺して身動きをとれないようにしたりしてと、全員の確に捕まえていく。

相手全員を先頭不能にするのに10秒もかからなかった・・・思わず見とれていたら見とれている間に終わってしまったww

しばらくしてアンチスキルが到着し、その中に黄泉川さんがいたので事情を説明したら「ともかく無事でよかったじゃん、早く学校に行きなもう遅刻じゃんか」と、言われた。

俺たち（俺、佐天、黒子）はそれぞれ自己紹介をして、俺と佐天は黒子に礼を言い急いで学校まで行くのであった。

余談だが、能力を使うときはパーソナルリアリティー（自分だけの現実）を把握してなければいけないらなかった。

その話を聞いてからシステムスキャンを受けた俺は無事レベル3と認められた。

現実と二次元が交差する時物語は・・・破壊の一手を辿る

転校生（前書き）

どうも、厨二病丸出しの魔王です。まあそれは置いて、

だ、誰か・・・ダメだしでも慈悲でも憐れみでもいいので感想を・・・
お願いします。

・・・

ハッ！！僕は何を！？贅沢言ってすいません、ごめんなさい、ありがとうございます。（土下座）

いつも文章分かりずらくてすいません（また土下座）

初心者なので多めに見てやって下さい。 （他人事） ピュ

読み返してみてもほんとひどいと思いました。なので治した方がいい
と思うところどんどん指摘お願いします。まあこれ読んでくれる
人がいればですが・・・

転校生

俺は今、教室のドアの前にいる。

すでに職員室での転入手続きは済ませてある。

手続きの時、俺が職員室で小萌え先生を見た時は思わずロリ属性が覚醒しそうになってしまった・・・orz

「今日は転校生を紹介するのですよ」

教室の中から声が聞こえた。とたんに騒がしくなる教室、、、と、、、教室の中からこんな声が聞こえてきた。

「もう明後日からは、夏休みなのに転入生？」

「この展開は！？女の子だにゃー！！！！」

「かわいい子だといいなあ」

「ワイはどんな属性でもおkやで？」

「コラ、3馬鹿、幾ら可愛い子だからってちょっかい出しちゃだめよー！！」

「今日、セブンミスト行くから一緒に誘っちゃおっか？？」

その声を聞きながら俺はあれ？いつの間にか転入生は、女の子。しかも可愛い子ってことになってんじゃね？？？

小萌え先生もそれを聞いてあわあわしているし・・・

「じゃあ、赤霧ちゃん入ってきてくださーい」

この入りづらい状況で！？とか思ったりもしたが、まあしょうがないので俺が入ると

シーン という効果音が聞こえてきそうなほど静かになった・・・
・・・ぐっ、耐えろ俺！！

とりあえず、自己紹介。

親父も言ってた気がする。

どんな危機的な状況に陥っても自分を見失っては行かぬ、、、って

何事も最初の印象ですべてが決まるからな！ここは絡みやすい感じに

都市の外から来ましたー赤霧 闇耶でーす☆

好きな食べ物はたこさんウインナーとウサギちゃんのリンゴですw
キャハッ

えーとー、まだ全然わからないことだらけなのでー、ー、優しく教えてね？

その瞬間空気が凍った

・・・失敗した。

昼休み

結局誰とも話すことなく昼休みになった。

売店で軽くパンとヤシの実サイダー（珍しいので買ってみた）を買って教室に戻るとちょうど上条さんと土御門と青髪ピアスがバニーやらロリやらで揉めていた。

俺はチャンスとばかりにその輪に入っていき『この世界の神秘は全てロリでできている！・・・・・・・・ロリとは最強・・・・・・・・だから・・・・・・・・』

久々に俺は覚醒し、熱弁したw 青髪ピアスからは「転入生、今日からワイらは親友や」、土御門からは「ロリにそんな能力が！？」、上条からは「これからよろしくな」

などと一言ずつコメントをいただいた。

やはりフラグ立ての上条さんが一番普通だったが・・・・・・・・このリア充が！！爆発しろ！！！殺気を込めた視線を当麻に送ったらビクツと反応して

「わたくしめが何かしたでせうか！??？」

『お前の存在自体がいらつく』

当麻は本気で落ち込んでいた すぐに仲直りはしたがw

まあ、友情を育むという意味では、俺の昼休みはとてもゆういぎな時間だった、ただしクラス全体から浴びせられる避難の視線を体中に浴びせられることとなったが・・・

俺たち4人は、当麻の席を取り囲みこれからどうするか話し合っていた。

すると、いきなり青髪が土御門に耳打ちする。その瞬間 カツと土御門の目がこれ以上ないほど開き

「すまんカミヤん、シンやんこれから青髪と大事な用ができちゃったにゃ、じゃあまた明日な！」

「カミヤんシンやんまた明日な」

と言いながらものすごい勢いで教室から去って行った。多分かわい子がいとかで急いで見に行ったんだろう。

『当麻、どうする?』

「そうだな、上条さんは久々にバッテリーングセンターに行きたいんだが、闇耶はどうする?」

学園都市にバッテリーングセンターなんてあるとは思わなかった俺は、内心ではびっくりしていた。当然顔には出さないが、、ついでにそこで一劫の眼《アイオンの眼》を使えるか実験しておこう。この間みたいには実践ではない、使えませんでした。じゃ話にならないからな。

『よし！俺も行く、じゃあ決定だなWそうと決まれば早く行こうぜ！』

「分かった付き合ってくれるのかサンキューなWW」

そんなやり取りをしてから、俺たちは荷物をまとめて外に出た。

途中小萌え先生が「上条ちゃん、今日は補修の日なのですよ〜」とか言ってたが当麻は「よし闇耶、逃げるぞ！！」と言って何とか逃げ切った。

その時の小萌え先生は泣きそうな顔をしていて俺とは罪悪感に押しつぶされそうになったりもしたが 過ぎたことは仕方がない と、割り切ることにした。

【んじゃ、気を取り直して行きますか！！】二人の少年は息ぴったりにそう言いながらバッテリーングセンターへ足を向けた。

俺と当麻は、今バッティングセンターに来ていた。

『よし、当麻、俺は一番向こうにいった来る』『おい！そっちはプロの方たちがやるところ』『分かってる』大丈夫かよ』そんな会話をしながら俺は初めて親父とバッティングセンターに来た時の事を思い出しながらも、バッティングボックスに入りコインを入れ、少し深呼吸してからバットを構えた。

俺が最初にバッティングセンターに来た時、あの時の俺はまだひ弱で全然バットにボールが当たらなかった。そんな俺を見かねて親父は、「ボールは目で捉えるのではない、感覚で捉えるんだ。」と意味不明なことを言っていた。俺はその時、なんとなく気を集中させて感覚でバットを振ったら少しだけ　カスツ　と掠った事を覚えている。

まあそれも今となればいい思い出。何せ今はもう高校二年である時とは違うのだ。

『無事に発動できればいいな』、言った瞬間

ヒュッ　ボールがすごい勢いでこっちに向かってきている。俺はあわてず劫の眼を発動させるために、金に輝く右目を想像し・・・・・・発動した。

世界が一変した、、視覚的ではなく感覚的に、ボールや向こうを歩いている物の進む場所が予測できる！！

俺は前を見据える。ちょうどボールの通る予測線におもいつきりバットを振りぬいた、カキーン　と、辺りに鳴り響いた。

『おお！すっげええええ！！』

俺はものすごい興奮状態に陥っていた、なにせ一発目からホームランだ、興奮しない方がおかしい。その後も俺は興奮しながらも一本、一本的確にボールを打っていった、

『そろそろ終わるか・・・』

どれくらい経っただろうか、気が付いたらもう腕がしびれ、目も限界になっていた。バッティングボックスから出たその時、

『ツウアアアア』

不意に右目に激痛が走った。

「おい、大丈夫か！？何があった？」

『ッ、当麻か？いや、何でもない。……すぐ起きる』

そう言って俺は右目から手を離し当麻の前に立った。

まだ痛むが立てないほどではない、幸いにも周りに他の客や店員がいなかったので騒ぎになることはなかったがまだ痛む。

俺がまだ少し顔を顰めていると当麻が

「まだ痛むなら、晩飯も兼ねてファミレスでも行かないか？」と、飯に誘ってきたので、

『そうだな、、さっきのバッティングで腹も減ったし行こうか』
そんなこんなで多少ふらつきながらも当麻に支えてもらい無事、おなじみのファミレスへと足を向けた。

ファミレス

「いらっしゃいませ」

ファミレスのドアを開くと、ウェイトレスのおねえさんが笑顔でそんな言葉とともに迎えてくれた。

「二人でお願いします」

「かしこまりました、こちらへどうぞ」

案内され俺と当麻は席に着く

俺はイカスミ・スパゲッティa、マシュマロ入りを注文し、当麻は
ゴーヤ エスカルゴ 苦瓜と蝸牛の地獄ラザニアあとドリンクバーを2つ注文した。

相変わらずこの学園都市には、不思議な食べ物が多いと感心しながらも当麻が、

「闇耶、俺は今からドリンクバーもらってくるからついでにお前のももらってきといてやるよ。なにがいい？」

『悪いな当麻じゃあ・・・コーヒーのブラックで、頼む』

「おう、了解。上条さんはコーヒーとか飲まないから良くわかんないが、ここのコーヒーはファミレスにしてはうまいらしいからな。」

『そうなのか？ラッキーだなw』

「んじゃ、注いでくるわ」

そう言って当麻はドリンクバーのところへ足を運んだ。

もう俺の右目の痛みは随分落ち着いている。

（ああ、少しなら大丈夫だけど長時間、力を使いすぎると俺の体がついていけなくて負担がかかるのか・・・他の力も同じなのか？）

考えをまとめていると視界の端に複数の不良どもに囲まれている女の子の姿があったので、（この間は力をうまく使えなくて佐天さんを助けられなかったけど今回は大丈夫だろう）

そう思いながら俺は席を立ち女の子の元へ向かい不良たちに声をかけた。

『おいあんたら、彼女、困ってんじゃねーか』

「なんだこいつ？」

「何か用か？アア？」

ん？不良たちで隠れて見えなかったが囲まれていたのは学園都市最強の7人の中の第3位、超電磁砲^{レールガン}の二つ名を持つ御坂 美琴だった。

あれ？この役割ってたしか当麻のじゃなかったっけ？まあ御坂ならこの状況でも大丈夫だろうと思いき逃げよう、、そう決断した後の行動は早かった。

『すまん、間違えた。』

「喧嘩売ってんのか？」

「逃がすと思うか？舐めてんじゃねーぞ」

どうやら逃げられそうにない。その時ちょうど当麻がドリンクバーを注ぎ終わって席に戻りこちらに気づいたようだった。俺はそんな当麻の手をとり

『スマン当麻、そして逃げるぞ!』

「上条さんは状況を良く理解できないんでせうが?」

そんな声を無視して俺と当麻は不良たちから逃げるために店から出て暗い夜道を走った。

「まてや糞ガキ」

「おるあ!! ちくしょうこのクソガキ止まれやこの逃げ足王!!」

『ロリコンどもが、消し炭にしてやろうか!』

「うるっせえ! ぶん殴られねえだけ感謝しやがれサル並野郎!」

言い返しながらも走り続ける。

『くそっ、しつこいな能力使ってやろうか』

「やめとけ、お前レベル3だろ?いくらお前でもあの人数は無理だ、
、にしても、ああゝ 結局食ってもいないのに食い逃げ扱いされてるし・・・不幸だ」

『悪かったってお前だって女の子が絡まれてるの見たら放っておかないだろう?今度おごってやるから』

「まあそれもそうだな、奢ってくれるなら仕方ない」

ひたすら走り続けていたら、いつの間にか橋の上にて、不良たちもいなくなっていた。

「く、くそ……やっと撒いたか」

『ああ、……めんどくせえ、もうこんなことはこりごりだぜ』

俺は、橋の上にへたり込みながらも一度も相手を殴らなかったことに確かな満足感があった。

だがそこに、ファミレスにいた御坂からの声が聞こえそんな満足感も台無しにしゃがった奴がいる。「つたく、何やってんのよアンタ達。不良を守って善人気取りか、熱血教師ですかあ？」

「げっ、ビリビリ!? ま、まさか不良たちが追って来なくなった理由って?」どうやらこのころにはもう当麻と御坂は知りあっていたらしい。

「ビリビリ言うな! まあ。めんどいから私が焼いた……あとそのこのアンタ、無能力者のくせにあたしを助けようとしたわけ? 見たことないけどあんた誰?」おれが能力を使って不良どもを追い払わなかったから彼女は、俺を無能力者だと勘違いしてるらしい

『俺は、赤霧闇耶だ、よろしくな、ちなみに能力はちゃんとあるぞ』

俺は、出来るだけさわやかな笑みを浮かべて答えた。

「だったら最初から使いなさいよね／＼／＼／＼まあいいわそれより
アンタたち、“レールガン”って知ってる？理屈はリニアモーター
カーと一緒にね、超強力な電磁石を使って金属の砲弾を打ち出す艦
載兵器らしいんだけど」

御坂は、多少、顔を赤らめながらもゲーセンのコインらしき物を弾
きながら言う。

「—————こういうのを言うらしいのよね！！！」

刹那、俺は神にもらった能力の一つ、破壊の紅蓮炎を前方に盾を作
るように想像し具現化した。この炎は全てを焼き焦がすので地面に
はギリギリ当てずに器用に空中へ放った・・・瞬間俺の右手が赤い
炎の手となった。比喻ではない、完全なる炎。

ゴウウウウウオオオオオ “それ”は、ものすごい轟音
を立てながら御坂と俺の間に立ちはだかった、・・・一瞬腕が炎に
なったが当麻と御坂には見られることはなかった。どうやらこの力
を使うときは右手を炎化させないといけないらしい。

しかし我ながらこの威力はすごい・・・

一瞬オレンジ色のレーザービームみたいなのが見えた気がした
がそれは既にその炎の中に包まれて消えていた。

「おい、闇耶————今の何だ！？システムスキャンの時はこんな炎
出さなかったよな？」

『まあ・・・な、今は能力とは別の物だ、このことは誰にも話したくない、見なかったことにしてくれ。』

「闇耶が言うなら仕方ない、なにか言いたくない理由でもあるんだろ？ だったら余計な詮索はしないでおいでやるよ」

『スマン当麻、恩にきるぜ！』

ちょうどその時、炎がだんだん消化してきた。地面には、あてなかったはずなのに“その付近”は、アスファルトが剥き出しになり鉄とコンクリートの鉄橋が熱で焼け爛れ形を変えていた。

その奥から御坂が出てきた。

「アンタ、何者よ？ この炎明らかにレベル5以上のものよ。この学園都市にレベル5の“パイロキネシスト”は、・・・いない。そっちのアンタは、能力を消す奇妙な力持ってるし・・・私の攻撃を防げる・・・ってアンタ達一体何なの！！??」

『ただのロリコンの高校生です。』一応俺は自分でロリコンだと自覚している。

「ただの不幸な高校生です。」

【じゃあな！！！】俺と当麻の言葉は見事にハモリすぐさまその場から立ち去った・・・

「ちょ、待ちなさいよアンタ達！」

そんな声が聞こえた様な気がしたが既に寮へと向かった俺たちには、

正確に聞きとる術はなかった。・ ・ ・ ・ ・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5107o/>

とある妄想の現実破壊(リアルブレイク)

2010年10月31日00時06分発行